

別記様式第2号の1

研究計画概要書

研究課題名		下腿三頭筋への静的ストレッチングがジャンプ着地時の前十字靭帯損傷リスク肢位に及ぼす影響
研究組織	研究責任者 (所属・職名・氏名)	名古屋大学医学部保健学科理学療法学専攻 教授 鈴木重行
	研究分担者 (所属・職名・氏名)	名古屋大学医学部保健学科理学療法学専攻 4年 大谷真奈
	共同研究者 (所属・職名・氏名)	名古屋大学大学院医学系研究科リハビリテーション療法学専攻 山中英士 名古屋大学医学部保健学科理学療法学専攻 中川寛菜 名古屋医健スポーツ専門学校 理学療法科教員 阿部信美
	研究事務局 (機関の名称・住所・連絡先)	名古屋大学医学部保健学科理学療法学専攻 教授 鈴木重行 〒461-8673 名古屋市東区大幸南 1-1-20 TEL/FAX 052-719-1362 メールアドレス suzuki@met.nagoya-u.ac.jp
研究の意義・目的		前十字靭帯 (anterior cruciate ligament; 以下, ACL) 損傷はスポーツ中に頻発する傷害の1つであり, 競技に復帰するまでに半年以上の時間を要するため, 予防法の確立が必要である。ACL 損傷の約 70%は非接触型の損傷であり, カutting動作やジャンプ着地動作での受傷が多く報告されている。先行研究ではジャンプ着地時の ACL 損傷のリスク肢位として, 膝関節外反角度の増大, 膝関節屈曲角度の減少を報告している。また, 他動的な足関節最大背屈角度が低値であるとジャンプ着地時にリスク肢位を来し易いことが報告されている。そこで, 関節可動域を増大させるために広く用いられる静的ストレッチング (static stretching: 以下, SST) によって足関節背屈角度を増加させることで, ACL 損傷リスク肢位を改善させることができると仮説を立てた。しかし, SST の介入により ACL 損傷のリスク肢位が改善したという報告はない。したがって, 本研究の目的は下腿三頭筋に対する SST が, ジャンプ着地時の ACL 損傷のリスク肢位に及ぼす影響を検討することとした。
主な選択基準		健常女子学生

研究方法(多施設共同研究の場合は、 本学の役割も記載)	対象は、健常女子学生とし、対象筋は下腿三頭筋とする。 SSTは、セルフストレッチングで60秒×2回を4週間、毎日実施する。 評価指標は、ジャンプ着地時の各関節角度(膝関節外反角度、膝関節屈曲角度、足関節背屈角度)とし、三次元動作解析装置により求める。 評価指標である passive ROM、stiffness、腓腹筋弾性率、腓腹筋筋膜弾性率、ジャンプ着地時の最大膝関節外反角度、最大膝関節屈曲角度、最大足関節背屈角度、ジャンプ跳躍高は、介入前、SST直後、4週間後にそれぞれ測定する。
研究期間	名古屋大学倫理委員会許可日～平成30年3月31日
インフォームド・コンセントの方法 (説明を行う者等)	説明者：名古屋大学医学部保健学科理学療法学専攻4年 大谷真奈 1) 本研究への参加の判断は完全に対象者の自由意志に基づいて行われ、参加拒否によって本人がいかなる不利益も被らないことを明確にする。 2) 本人には文書及び口頭で説明し、研究の内容を理解した上で同意が得られた場合にのみ、同意書に署名を依頼する。
個人情報の管理体制(個人情報管理者、連結表の管理体制等)	個人情報は匿名化し、厳重に保存する。本研究が論文などで報告される場合にも匿名化を厳守する。
研究で収集した試料・同意書の保管場所、研究終了後の試料の取扱い	1) 対象者の個人情報はIDによって管理して、個人が特定できないようにした上で、資料は原則として研究終了後に廃棄する。 2) しかし、もし同意していただけるようであれば、将来の医学研究のための貴重な資源として、研究終了後も保管させていただくことがある。
効果安全性評価委員会 (委員の職名・氏名・審査間隔)	
被験者に重篤な有害事象が生じた場合の対処方法	